総　　括

田　中　毎　実（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

（田中）　どうもありがとうございました。時間が多少オーバーしていまして、総括することはとてもできません。僕は討論に参加したくてしかたがなかったのですが、残念なので、最後にちょっとだけ自己満足させていただこうと思っています。

途中で遠藤さんが言われたことと関係しますが、今日のお話を聞きますと、お話の中でそれぞれの話題提供者が置かれているローカルな事情が透けて見えると思います。それぞれのローカルな事情に即して、かなりいろいろやっておられることが透けて見える。それをお聞きになったら、多分自分たちのところはどうなのかという話になるのだろうと思います。そのときに、僕は割と悲観的なことを書くのですが、実際には楽観的なのです。例えば、このごろ児童虐待がものすごく報道され、虐待の連鎖などということを言う人がいるのですが、本当に虐待の連鎖があれば、児童虐待などはもっと日常的にあふれていて、どこにでもあるわけです。恐らく虐待の連鎖を続けていく力よりは、連鎖を断ち切っていく力が多いから、児童虐待は現在でも非日常なのです。ですから、基本的に何とかなると思っているわけです。そこら辺が遠藤さんに攻撃されたのかもしれません。僕は最後には楽観的に書いてしまうというところがあります。

ただ、今日の非常に強い印象の一つは、井下先生の発言です。友人なのであえて言ってしまいますが、あれほど穏やかな井下先生が悲憤慷慨するわけですね。彼が悲憤慷慨していることや林先生が言われていることに、僕は全面的に賛成です。ああいう印象がどうしたってあるのです。普通のまっとうな人が考えたら、悲憤慷慨するようなことがやはりあるわけです。そこのところを押して、なおかつ林先生の言われるようにやる意味があるとしたら、COL ならCOL を、僕らが蹴っとばしながら育てていくということをしないと、仕方ないのではないかという感じを受けます。できるかどうかは分かりません。

それから、遠藤さんが学内について書かれていることをあとでお読みになるといいと思いますが、よくここまできちんと書いていると思うぐらい、悪戦苦闘されていることが細かく書いてあります。全くそのとおりだろうと思うのです。僕らの状況は決して明るくはありません。どちらかといえば、まともにものを考えたら怒りに狂うような状態はあるのですが、しかし、今日だってこれだけのかたが集まるわけですし、何とかなるのではないかという感じも持ちます。総括にも何もならないのですが、一応総括のつもりで。最後にセンター長からご挨拶をいたします。